

---

# 鼻サンドバッグ

プライア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鼻サンドバッグ

### 【Nコード】

N1697J

### 【作者名】

プライア

### 【あらすじ】

旧校舎に呼び出された不良女子高生の目崎文はそこで不良男子2人からのリンチに合う。初めは抵抗したものの次第に力がなくなつた文は不良男子の1人から体を押さえつけられ、自慢の高い鼻にパンチを打ち込まれてしまう。さらに文を鼻サンドバッグとして文に恨みを持つ不良たちによって徹底的に鼻がいたぶられていく。そして、文の鼻にとどめをさしたのは・・・

「へへ、来たな目崎。」

「あん？」

ある日文は旧校舎の裏に呼び出す手紙をげた箱の中で発見した。文は他の不良女子から呼び出されていたと思っていたが実は男からのものだった。

「呼び出したのはあんた？まさか告白とかとちゃうやろな？」

「なわけねーだろ！お前最近調子のつてるよな！女子が女子に対して調子のるのは勝手だが男に対しても幅効かせやがって。彼氏が副ボスならここまで調子にのれんか？」

「じゃーなに？あんた女に暴力振るうの？」

「男か女が関係ねえ。調子乗ってるやつはボツコだ。」

文は男とまともにやつても勝てるわけがないので引き返そうとする。しかしそこにはさらに2人の男が現れた。

「何？あんたら？」

「にがさねーよ。ボツコだ！」

「くっ！なめんな！」

文は逃げ道のところにいる男に特攻をかける。文は男の顔を1発なぐった。

バコッ

「うお！」

「へへ！」

ガシッ

「！！！」

しかし文は殴ったその手を男につかまれてしまった。

ドゴッ ドゴッ

「ぐあっ！」

「おら！」

パンツ

「きゃあ！」

不良男子の1人に2発殴られ、壁に叩けつけられた。女のそれとはダメージがまるで違う。文は体力を削られた。そして最初に呼び出した男が文の側にやってきた。

「ほれ。」

グニツ

「あつ・・・。」

文は自慢の高い鼻を男につままれた。そしてそのまま摘み上げられ、上へとひきのばされていく。

グニーン

「ああ！」

「ははは！痛いか！」

「な、なにをするのぉ！」

「へへへ！もつと引つ張ってやる！」

グイーーン

「ああ！痛い！」

文の鼻はどんどん引き伸ばされていく。ただでさえ高い鼻が一段と高くなっていく。

「はん！かなり高い鼻してんな。こんな高い鼻してるから生意気になれるんだよ。」

「くう放せ。」

「へん生意気だな。さてこの生意気さが少しはおとなしくなるように、その高い鼻を折ってやるよ。」

「えっ！？」

ブオツ

バスウ

「あああ！！！」

男は文の鼻から手を放し、同時に1発文の鼻にジャブを叩き込んだ。文は想像以上のダメージに顔が歪み悲鳴を上げた。

「はああ痛い。」

「くくく、鼻が高いってのはこういう時には不便だな。まあこんなのは序の口だ。どんどん折れていく鼻の痛みを感じながら自分の今までの行いを反省しろ！」

「そんな！や、やめろ！」

ガバッ

別の男が文を押さえつけた。これで文は完全に動けなくなった。

「ははは！これでお前の鼻はサンドバッグも同然だな。そうだ、いいことを考えた。」

「え！？」

「他校とのケンカで相手の鼻を狙ってダメージを与える感覚をつかむための練習だ。つまり、鼻サンドバッグってことだ。」

「いや！鼻はああ！」

「オラオラオラ！」

バスバスバスッ

「！！うぐっ！！」

バスバスバスッ

「ああああ・・・」

とうとう文の鼻への攻撃がはじまった。男は文の鼻にジャブのラッシュをかける。すでに最初の数発で文の気力が失われはじめた。

バスバスバスッ

「鼻が・・・」

バスバスバスッ

「痛い・・・」

ムクムク

ジャブを食らい続けた文の鼻は少し赤く変色して腫れてきた。しかし男は遠慮なく文の高鼻にジャブを打ち込む。すぐに折れないように少しでも長い間苦しむようにじわじわと痛ぶっていくのである。

1発2発3発・・・文の鼻は杭にとんかちを打つようにどんどん打ちこまれていく。

バスバスバスッ

「ううう・・・」

バスバスバスッ

「あううっ・・・」

ツゝツ

文の口からもはやうめき声が漏れはじめた。鼻からは1滴の血が流れ落ちた。しかし次のパンチでその血は引き伸ばされた。また次の血が流れ落ちては同じようになる。

「お前ばかりずるいぞ。オレにもやらせてくれよ。」

「分かったよ。でもすぐ折るなよ。たっぷり時間をかけて鼻サンドバッグをなぐっていくんだ。」

「うぐっ・・・あ・・・あ・・・」

「了解。おら！」

バスバスバスッ

「ああああ・・・」

殴っていた男と押さえつけていた男が入れ替わり、今度は押さえつけていた男が文の鼻にラッシュを打ち込み始めた。入れ替わるタイミングに逃げる事が出来るほどの体力がすでに文には残っていなかった。

バスバスッ

ツゝツ

ツゝツ

「う・・・くっ・・・」

バスバスッ

ツゝツ

ツゝツ

「いやあ・・・」

バスバスバスッ

「！！！」

ドクドクドクドク

「あぐう・・・」

文の鼻血の量が増した。もはや文の鼻は痛々しく変色している。とつくに声も力のないうめき声に変わっていた。

「あつれゝ何やってんの!？」

「おー里奈に真紀か。今日崎にたつぷりとお仕置きしてるところだ。」

「あー!? 目崎じゃん!? 何? すっげえ無様!!」

「うう・・・」

里奈と真紀は文の不良女子の同期だった。しかし、元々それほど仲はよくなく、文が副ボスの彼女となつてからは文に対して反感を持つようになっていた。

「うつわゝエライ顔。もしかしてこいつの鼻を攻撃してんの!？」

「ああ。今のこいつはただの鼻サンドバッグだ。お前らも鼻サンドバッグを叩くか？」

「きゃーやりたい!」

「!!!」

「こいつの高い鼻いつか折ってやりたいって思ってたの!」

「ああ。好きなだけ叩け。ただまだ折るなよ。もっと時間をかけてじわじわといたぶってやるんだ。」

「やった! きやはは!」

「や・・・め・・・ろ・・・」

里奈は文の願いをよそに文の前に立つてパンチを構えた。文は顔の角度を傾けてかわすことも出来ない。

「目崎! てめえム力つくんだよ! おら!」  
バスウツ

「!!!・・・ぐう・・・っ・・・」

「ははは! マジ痛がつてる! もう一発!」  
バスウツ

「・・・あが・・・あつ・・・」

里奈は一発一発重みのあるパンチを文の鼻に叩きこんでいく。文は

鼻への激痛でより頭が真っ白になっていく。加えて自分より下に見ていた奴に鼻を殴られていくことに対して屈辱感を感じざるをえなかった。

そして、

「おらあつ！これはどうだ！」

バスウツ

（あ．．．．．）

今の一発が文の鼻に入った瞬間、文は自分の鼻に違和感を感じた。文は嗅覚という五感の一つが司る自分の鼻という器官が今の里奈の一撃で破壊されてしまったことを感じた。

（はなのおくが．．あつ．．い．．．）

だめ．．．こ．．んな．．．やつ．．．に．．．あや．．．の．．．は．．．な．．．が．．あ．．．．．）

ぶしゅうつうつうつ

次の瞬間、文の鼻から一斉に鼻血が放射状に噴き出した。

「あがあああああああああああああ！！！！！！！」

文は痛さのあまり大声で悲鳴を上げた。その様子を見て、里奈と真紀はげらげらと笑い始めた。鼻血を放出しながら憔悴していく文の顔が快感でたまらなかったのだ。

そしてそのうめき声は命乞いになっていった。

「あ．．あうううつ．．．い．．．いやだああ．．．．．」

「ん？」

「うぐうつ．．．ゆ．．．るし．．．てえ．．．．」

「おお！これは！」

「．．．うう．．．たえ．．．ら．．．れ．．．な．．．い．．．．．は．．．．．な．．．あ．．．．」

「ははは！とうとう弱音を吐き始めた。天下の目崎文がなんてザマだ！」



バスバスバスッ

「が・・あ・・はな・・お・・れ・・る・・」  
バスバスッ

「お・・お・・れ・・る・・う・・」  
シャー――

文はあまりに長時間鼻にパンチを打たれ続け、とうとう心が折れてしまった。表情はもはやない。あまりに鼻を打たれすぎて鼻を折られるという恐怖心が一杯になり文はおもらししてしまった。

「ははは！なんて無様だ！おもらしかよだせえ！」

ドクドクドク

「へへ！じゃあそろそろ終わらせてやるか！真紀やるか！？」

「え！いいの！？」

「ああ！お前の強烈なパンチでこのおもらし女の鼻を一発バキッとやってくれ！」

「やったあ！」

「あう・・やめ・・てえ・・」

文は懇願した。しかしもちろん聞き入れてもらえるはずもなかった。文にはとづくにここから抜け出すほどの力はなくなっていた。さらに真紀は元ボクシングの部員であった。

文の運命は潰えたも同然だった。

「さあ・・いくよ！！」

「やめてええ・・」

「おらあああっ！！」

ブオオオオッ

バスウウウウウウッ

（ああ・・・）

文の自慢の高い鼻は真紀の突き刺すように鋭い重みのあるストレー  
トによってしっかりと打ち抜かれてしまった。狙いはしっかりと定  
められ、タイミングも角度も何もかも完璧だった。文は走馬灯のよ  
うにこの一連の流れをスローモーションのように感じた。

（あああ・・・はながあ・・・）

ミシ

（う・・・ちこまれ・・・た・・・）

ミシ

（おし・・・つぶさ・・・れ・・・てく・・・う・・・）

ミシミシ

（ああ・・・もうだめ・・・え・・・）

ミシミシミシ

（あやの・・・は・・・な・・・）

ミシミシミシミシ

（お・・・れ・・・る・・・う・・・）

バキイイイイイイ

スローモーションな感覚の中で文は鼻が少しずつ折れていくのを感じていった。そしてとうとう文の鼻は折れてしまった。ゆっくりとした感覚の中自分の自慢の高い鼻がどんどん果てていくことに屈辱を感じると同時に、恐怖心をも感じていた。文は鼻が折れていく過程で自分が戦意喪失していく様に幻滅した。心は折れた。プライドも粉々になった。完全な敗北者のごとく、文は本能の赴くまま自分が最も無様にやられる姿を体現していった。

グニャアッ

「きやははははは！！目崎の鼻折っちゃった！！」

「すげえ！ぐんにやり曲ってる！」

「あぶうううううううう……」

ドバアアアッ

文の鼻からはどす黒い鼻血がまるで滝のようにいつぺんに噴き出した。文は元々声が高い方だ。しかし、その高い声の面影もないほどに腹の底から発するような重く低い声でうめき声を上げた。文の人生で初めて、しかもこれほど惨めなものが他にないくらいの無様なうめき声だった。

とうとう折れてしまった文の鼻は悲惨なものだった。よく通っていた鼻筋はぐんにやりと歪み鼻は少し右へと曲がっていた。尖っていた鼻先は少し押しつぶされて丸みを帯びほんのわずかだが横へ広がっていた。

（ああ……）

文の美しさのシンボルであった高い鼻は破壊され、醜さのシンボルへとなり果てた。文はみんなに自分の不細工になった鼻を見られることが耐えられなかった。

さらに……

「文！」

「うそ！ヒロキ！」

(え・・・)

「文！その顔・・・」

なんと文の彼氏のヒロキが現れたのだ。ヒロキは目の前でつい今しがた鼻を折られた文の姿にショックを受けた。

「お前ら！よくも文を！！」

「ひ・・・ろ・・・き・・・た・・・す・・・け・・・て・・・」

ヒロキは頭に血が上っていた。そして男子不良の元に殴りにかかった。

しかし、

「やらせるかよ！」

ガッ

「うわ！」

ヒロキは真紀に足をひっかけられた。そのため向かう方向が代わってしまった。ヒロキの勢いは止まらない。

そして、なんとその先には盾にされている文がいた。

「！！文！」

(う・・・そ・・・)

勢いのついたヒロキのパンチは盾にされている文の鼻へ向かっていった。そしてゆっくりと文の鼻にヒロキの拳が吸い込まれるように入っていった。

スーッ

(こんな・・・こと・・・っ・・・て・・・い・・・い・・・

・・・あ・・・あ・・・い・・・や・・・あ・・・

・・・)

グシャアアアアアッ

ヒロキの拳はしっかりと文の鼻に打ち込まれて、文の鼻はグシャッ

とつぶれてしまった。ヒロキの拳には文の鼻骨が砕け鼻がぺしゃんこになっていく感触がしっかりと残ってしまった。

文の鼻は愛する者の手によって完全に破壊されてしまったのだ。

「あ……文……」

「ひ……ろ……ふい……」

パッ

ブーン

「きやははは！！傑作！ウケる！！！！」

「まさか彼氏がとどめを挿すなんてな！」

「あの高い鼻がぺっしゃんこになっちまったな！ははは！」

「ああああううう……」

文は叫ぶ気力が無くなりただ本能のままにみじめにうめいた。鼻はまっ平らになった。鼻はぺしゃんこになってしまった。あんなに高さが自慢だった文の鼻がぺしゃんこになってしまった。

パッ

ドサッ

文は仰向けに倒れた。

「文……」

「見るヒロキ。お前がとどめをさした彼女のその無様な面を。」  
ドバドバドバドバ

「ひ……ろ……ふい……」

「ああああああ！！！！文ああああああ！！！！！！！！」

「あ……や……の……」

ムクムクムクムク

「……ふあ……な……が……あ……」

ムクムクムクムク

ガクッ

ぺしゃんこにされた文の鼻はそのまま赤く大きく大きくはれていっ

た。そして文は気を失った。

「あのさ〜目崎文つていたじゃん？」

「ああ、あの不良の？どうかしたの？」

「おとといさ〜旧校舎の裏に男子たち呼び出されてボコボコにされたらしいよ〜。ボコボコっていうかバキバキ。」

「バキバキ？もしかして鼻？」

「そう鼻〜。あいつの自慢にしてたあのマジ高い鼻がバキバキだつて。」

「マジで〜痛そう〜。」

「でもいいじゃん。むくいだよ！むくい！」

「へへ！鼻バキバキか！あの女、いい気味！」

「ぺしゃんこにつぶされたつてよ！！ははははは！！！」

「ははは！！見てやりたかったな〜その面！」

ピロリロリン

「ん？メールだ？。佳奈からだ。タイトル「目崎文の鼻」だつて！」

「マジで見たいみたい！」

ピッ

「はははは！！えぐっ！！！」

「うわあ！マジうける！！ほんまにぺしゃんこや！」

「この画像みんなに回そう！ははは！！！」

そして文の鼻のつぶされた画像はチェーンメールとしていろんなところに出回り、もはや隣の県にまで広がってしまった。文は鼻も治らず、しかもこのメールの一件で完全に失墜した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1697j/>

---

鼻サンドバッグ

2010年10月21日20時27分発行